

〈論文〉

乳児～幼児の年齢別クラスにおける地震防災保育の実践の試み

Trial of Earthquake Disaster Prevention Childcare Practice for Each Age Class from Infant to Toddler

山 田 伸 之 丁 子 かおる
YAMADA Nobuyuki CHOJI Kaoru
(高知大学理工学部) (和歌山大学教育学部)

2024年11月29日受理

抄録

We have continued to search for and practice content of disaster prevention childcare for young children from 0 to 6 years old that encourages hands-on, spontaneous activities by children and that can be undertaken by children's school teachers. This time, disaster prevention care was divided into three classes: one for 1 and 2 years old, one for 3 and 4 years old, and one for 5 years old. This practice is expected to extract differences in the developmental process and improve the quality of disaster education for infants and toddlers. In this report, we present a summary of the behavior of children who were exposed to disaster prevention care and their teachers, based on video recordings and a questionnaire survey of teachers.

キーワード：保育園、地震防災保育、防災教室、乳児、幼児、年齢別

1. はじめに

2011年東日本大震災以降も学校・園などでの防災教育の充実化のための取り組みがなされている(例えば、文部科学省^{1),2)})。しかしながらその最中も、2016年熊本地震や2018年北海道胆振東部地震、さらに2024年能登半島地震など大被害をもたらす地震は多発している。これらの地震は、学校・園で子どもたちが滞在する等の時間帯(学校・園管理下)でなかったため、学校・園での子どもたちへの直接的な被害はなかったものの、地震災害に対する備えは、さらに重要なものとなっている。その上で、園児・保育者・保護者を一体とした防災教育の充実化や相互の連携が求められている。

こうした状況下で防災教育の実践や研究は蓄積され、取り組みの「量的な改善」は進んでいる(例えば、文部科学省²⁾)と考えられるが、保育園や幼稚園などでは、避難訓練を中心にした活動のみにとどまることが多いのも実態である。従って、就学前施設での防災を意識した保育の取り組みの充実化は、喫緊の課題でもある。こうした点は、内閣府防災教育・周知啓発ワーキンググループ防災教育チーム³⁾の提言に盛り込まれている。こうしたことから、著者らは、乳幼児を主対象にした体験的かつ子どもたちの自発的な活動を促す仕掛けと、保育者自らも取り組める防災保育の内容の模索と実践を継続してきた(例えば、山田・丁子^{4),5)})。

著者らのこれまでの実践は、幼児クラス(3-5才)をメインに据え、そこへ保育者とともに乳児クラス

(0-2才)の子らが部分的に参加する形で、乳児から幼児まで一緒に行っていた。それを今回は、1-2才児クラス、3-4才児クラス、5才児クラスの3つに分けた実施とした。特に、1-2才の保育園でのいわゆる乳児クラスに限定し注目した防災活動の実践例の報告等は、これまでの例が見当たらないことから、発達過程の違いによる差異を抽出することで、今後の乳幼児向けの防災教育に資する情報は、子どもたちとその周囲の大人たちを含めた教育的理解を促すきっかけとなることが期待される。本報告では、防災保育を受けた子どもたちとその担任保育者の言動および保育者へのアンケート調査等を取りまとめたものを報告する。

2. 防災保育(防災教室)の実践とその内容例

防災保育の実施は、2023年2月10日に、大阪府堺市北区に位置する東三国丘保育園(認定こども園)において行った。参加した園児は在籍数138名(0才児12名、1-2才児48名、3-4才児51名、5才児27名)の大部分、保育者は20名および和歌山大学教育学部学生9名、そして著者らである。

今回の防災保育の中の防災教室の内容概略については、表1に示す。この形式は筆者らのこれまでの実践等⁵⁾と同様に、子どもたちが劇を見たり、身を守るための姿勢を歌とダンスを交えて学んだり、揺れや煙・暗やみなどを体験したり、危険物から回避したりする活動を体験する「手作り」のアトラクションを用意し、

それら一連の活動を1つずつ子どもたちが乗り越えていくように設定している。こうした災害時を模擬した手作りアトラクションについて体験的活動を保育者や友達と共に経験することで、恐怖心よりも興味や挑戦心を、そして、楽しさを盛り込むことで、低年齢児に合わせた学びや防災意識の育成として発達に応じた効果をもたらすことをねらいとしている。

なお、この実践において、保育者らは、子どもたちの活動を促すとともに実践の協力を、大学生らは、ペープサート劇を演じるとともに、体験コーナーの補助の役割を担った。こうした経験は、保育者たちが防災教育(保育)での取り組みの方法などを理解することや大学生の保育者・教員への動機づけにも役立つものと考えられる。

表1 園での実践活動の中身

A：ペープサート [※] 劇による防災劇の鑑賞 「地震で揺れたらどうする?ほか」⇒見て聞いて学ぶ ※紙に棒をつけた人形(ここでは布と厚紙に棒をつけた人形で、筆者が作成したものを使用)。	
B：歌とダンスによる身を守る姿勢の練習 「ダンゴムシのポーズ」⇒歌って踊って楽しく体で学ぶ	
C：アトラクションで災害体験 ⇒体験して学ぶ	
a	ぐらぐら台：揺れを体験
b	ゆらゆら壁：落下の危険物を避ける体験
c	じゃりじゃり道：足元の危険物を避ける体験
d	もくもくトンネル：煙の充満する空間を体験
e	まっくらトンネル：暗闇を体験
D：振り返り活動 子どもたちと保育者との対話による活動内容や地震時にならうとしたらよいか、などの振り返り ⇒学びをみんなで確認する・深める	



図1 表1Cの各様子の例

3. 保育中における年齢別クラスの様子の違い

防災教室は、1-2才児クラスと3-4才児クラス(0才児も3-4才児クラスの実施時に劇の鑑賞や体験アトラクションの一部などできる部分のみ参加)、5才児クラスをそれぞれ分けて行い、実施内容に差はつけず、表1の内容を取り扱った。一部、子どもたちとのやり取りにおいて、言葉での説明は短くし、動作を伴うようにするなど、年齢に応じて言葉がけや援助などに違いを設けて、その他の部分についてはおおむね同じものにした。

図2は、大学生らが演じるペープサート劇であり、これを鑑賞・見る姿の例を図3a)～c)に示す。a)は1-2才児クラス、b)は3-4才児クラス、c)は5

才児クラスの様子である。劇の中では、あわてんぼうのウサギと冷静な猫が地震で揺れた際の身の守り方や避難の仕方について、ドタバタを交えて伝える場面が設定され、①地震で揺れたとき周りに机があるとき、②地震のとき周りに身を守るものがないとき、③火事が発生して避難を要するときの3部構成とし、乳幼児ともに楽しく見る事ができるものとしている。そのため、図3のように、いずれのクラスにおいても、食い入るように劇を見ており、20分ほどの時間であるが、飽きがくることもなく落ち着いて見る事ができていた。また、3-4才児クラスにおいては、劇中ウサギが同じ失敗をするシーンでは、「また～!?」という内容を理解していると考えられる発言が出てきていた。1-2才児クラスでも、ウサギが怪我をするシーンにおいて、「痛い痛い」というウサギの気持ちを代弁し、心配する発言が子どもからあり、3才以上児とは異なる反応も見られた。

こうした発達年齢の違いによる反応の違いは、これまで乳児・幼児をまとめて一緒に実践していたときには、判明していなかった事柄であり、興味深い。こうした反応の差異を防災保育の中に意識的に組み込むことは、その効果向上に役立つ可能性がある。



図2 大学生が演じるペープサート劇の様子の例



図3 ペープサート劇を鑑賞している子どもたちの様子

表2 年齢クラス別の「防災保育・教室」の様子のおまけ

	a) 1-2才	b) 3-4才	c) 5才
	どの子どもたちもみんな真剣に見入っていた（各年齢共通）。		
ペープサート劇の鑑賞	劇の内容を理解しているわけではないが、うさぎとねこの劇を集中して興味を持って見ていた。少し心配そうであったが、表情の変化は小さかった。	地震のときについての劇を見ていることの認識がある様子だった。劇の雰囲気にあわせた表情の変化（心配と楽しいなど）は大きかった。「また～!」というツッコミの反応もあった。	劇の内容について、理解をもって見ていた。「地震」という言葉の理解がある反応だった。劇のストーリーに合わせた表情の変化（心配と楽しいなど）がさらに大きかった。
だんごむしのポーズの練習	2才：保育者や友だちの姿をまねようとしていた。 1才：先生の指示でポーズをとる姿がみられた（先生のまねをしようとしていた）。	お手本（保育者や大学生など）の通りにできていた（特に4才）。	ほぼお手本通りに整然とできていた。また、ポーズを持続させる（長い時間:1、2分間持続させる）こともできていた。行動の意味を考えながら動きをとれていた（言葉で理解を深める様子も）。

図4は、揺れた際に身を守るダンゴムシのポーズを練習する場面である。3-4才児や5才児クラスのほとんどの子どもたちは、大学生が見せるポーズを真似て、上手にダンゴムシのポーズをとり、床に伏せて頭を守る姿勢をとることができており、ペープサート劇や歌とダンスを通じた地震時の防御姿勢の取り方ある程度理解し、行動に移せていたものと考えられる。特に、5才児クラスにおいては、整然とかつ的確に指示に従っていてもいることが伺える。1-2才児クラスの子どもたちは、ポーズができた子どもと頭を守るか小さくなるかどちらかだけがでる子ども、行動の意味を理解できずにそのポーズができない子どもとに分かれ、頭を守ることにについて、まだ意識することが難しいようであった。筆者らはこれまでの実態から、1-2才児クラスでは頭を守ろうとする、または、子どもが小さくろうとする姿やポーズをしようとする姿があれば保育者に「できたね!」と認めるよう共通理解を伝えており、保育者も優しく関わる姿があった。また、1-2才児たちに、よく見られる行動であるが、手で頭を守る（覆う）のではなく、手で顔もしくは耳を覆う姿が見られた。

また、「ぐらぐら台」の上での揺れも手動のため、1-2才児には、揺れを小さくし、全てができなくてもポーズをしようとする姿を認めるようにした。「じゃりじゃり道」では歩行の安定を図って歩く空きスペースを小刻みに多くし、様子をみて保育者は手をつなぎながら道を渡る姿があり、一部、最初からトンネルを嫌がって入らない子どもを除くと、保育者の援助の下でほとんどの子どもたちが予定通りのアトラクションをこなし、混乱はみられなかった。

表2に上記の2つの場面における年齢クラス毎の子どもたちの様子を一覧にしたものを示す。発達年齢に応じた反応・様子となっており、違いが分かる。ペープサート劇においては、表情の差異が顕著に現れて、年齢があがるほど劇に対する内容理解が進んでいるこ

とが推察され、客観的にその理解の程度を測ることができる可能性がある。また、ダンゴ虫のポーズの練習においては、身体の発達にも関係する様子が見られたことのみならず、ダンゴ虫のポーズの行動に対する意味の理解度合いを推し量ることもできそうである。

ダンゴ虫のポーズの行動に対するこうした発達年齢の違いによる様々な反応の違いは、今後の防災保育の内容の設定・改変に大いに参考になるだけでなく、防災保育・教室での子どもたちの理解度を測る上での参考になると考えられる。さらに、身を守る行動のとり方に対する保育者の指導における子どもたちへの接し方の参考にもなると考えられる。



図4 ダンゴ虫のポーズを練習している姿の例

4. 防災教室実施後のアンケートについて

防災教室終了後に、教室全般や振り返り活動における子どもたちの様子や保育者目線での防災への意識の程度を把握するために、保育者へのアンケート調査

表4 保育者アンケート記述からの抜粋（太字：子どもたちの姿や言葉から感情を示す語）

年齢	クラスでの振り返り・子どもの気づき・感想
0	<ul style="list-style-type: none"> ・ペープサートの地震の場面では危険を感じるというよりは楽しんで見ている姿があり、興味を持っていた。 ・地震が来たら頭を守る動作⇒だんご虫ですが、子ども達も真似をして手を頭の上に乗せている姿があったので、避難訓練の際は「だんご虫」を意識して引き続き伝えていこうと思います。 ・実際に揺れや暗闇等のアトラクションを経験でき、子ども達も良い経験が出来たと思います。 ・保育者の動きが詳しく聞けたり身の守り方などを再確認することができました。
1	<ul style="list-style-type: none"> ・人形劇に興味深くよく見ていて、「地震」そのものの捉え方は難しくても、うさぎの怪我を心配したり物が倒れてくることに驚いたりして、話に入り込んでいました。 ・避難時のダンゴ虫のポーズをわかりやすく歌やダンスにのせて教えてもらえたことで覚えやすく、やってみようとする姿が見られました。 ・各体験コーナーでは、興味を持ってやってみたい子どもと怖がる子どもがいましたが、今すぐは地震への理解がむずかしくても、いつ起こるかわからないことなので、いざ起きた時に今日の経験を思い出し、叱咤の行動や身を守る術につながっていくことができれば良いなと思いました。
2	<ul style="list-style-type: none"> ・だんごむしのポーズが歌もあり、子どもがしやすいポーズだったので、楽しんでしていました。 ・ペープサートで災害についての話をしていただいたので、分かりやすくして集中して見ていました。 ・災害について体験することが初めてだったので、楽しみながら体験することが出来ました。（トンネルや台など）
3	<ul style="list-style-type: none"> ・ペープサートでの話が視覚的にもすごく理解しやすかったようで、振り返りの際に「うさぎのが楽しかった。」と声が多く上がっていた。 ・ぐらぐら台では「あれが怖かった。楽しかった。」、他にも「煙を通るのが楽しかった。」「荷物が落ちてくるのが怖かった。」など様々な意見があった。 ・煙を吸うとどのような危険があるのか、じゃりじゃり道を歩く時の靴の重要性など改めて伝えることで経験したことと結びつき、理解を深めることができたと感じる。ぐらぐら台の上でのだんごむしポーズも実践することでいい機会になりました。
4	<ul style="list-style-type: none"> ・色んなアトラクションがあって楽しかった、煙のトンネルが臭かった、真っ暗な道が怖かった、地震の揺れを初めて知ったからお父さんとお母さんに伝えたい、煙のトンネルは口をふさぐと息ができず怖かった、壁が倒れてきて怖かった。 ・机の下に隠れる、机がなかったら、落ちてくるものがないところでだんごむしのポーズをする、地震が起きた後火事になってもお部屋に玩具やリュックを取りに行かない、お昼寝中でもすぐに逃げる、あひる組やうさぎ組の子と一緒に逃げる、壁からすぐ逃げる。
5	<ul style="list-style-type: none"> ・地震の体験は怖かったけど、だんごむしのポーズをすることでしっかりと頭と体を守ることができた。 ・火事の煙が怖かったけど、姿勢を低くして頭を抑えることができた。 ・ガラスを踏まないように進むことが難しかったけど、しっかりと見ることで安全に進むことができた。

表3 保育者へのアンケート項目

Q 1. 担当のクラス・年齢・保育者歴
Q 2. 実施した地震防災保育についての全体の感想
Q 3. 印象に残ったもの ①ある ②ない
①ある場合、以下から、2つまで選択 (人形劇、ダンス、ぐらぐら台、ゆらゆら壁、じゃりじゃり道、もくもくトンネル、まっくらトンネル)
Q 4. 体験的な防災保育は子どもたちにとって必要か。
①はい ②いいえ
Q 5. 今回の地震防災教室(保育)を行ったことでよかったと思うこと、こうした方がいいと思うことはあるか。
Q 6. その他コメント
Q 7. 全体を通じて気づいたこと
Q 8. クラスでの振り返りを通じた子どもの気づき・子どもたちの感想の声など
※Q 2、5、6、7、8は自由記述式

(表3)を実施した。このアンケートは紙面への回答方式を取り、用紙配布・回収を園に依頼して実施されたものである。設問には表3に示す選択と記述形式を設定し、母数は少ないものの0-2才児(乳児クラス)の担当者12名と3-5才児(幼児クラス)の担当者8名からの回答を得た。

今回の内容等の全体的な印象を示す一つとして、表4に、Q8の回答から子どもたちの様子を表す記載を抽出し、年齢別の内容例を列記した。それによると、

総じて「楽しかった」という記述があり、子どもたちの印象付けに繋がったとみられる。ただし、一部「怖かった」という記述もみられ、混在する状態ではあるものの、年齢に関わらず楽しんで取り組むことができ、地震時の対応について印象に残った模様である。

また、表4によると、0才や1-2才児クラスでは、怖さよりも楽しさが上回っていたという様子が示され、(地震や防災への興味というより、様々なものへの)興味を引き出すきっかけになったものと考えられる。また、3-4才児や5才児クラスでは表現が多様で、保育者たちからも好意的な意見がほとんどであった。さらに、Q4では、すべての保育者が、今回のような防災保育・教育は重要で必要だと回答していた。これまでの避難訓練以外にはどうしたらよいかかわらなかつた様子が窺い知れ、子どもたち向けの今回の教室が、保育者への防災教育の波及的効果があったものと考えられる。

Q3で、保育者が印象に残ったものを1-2個選んでもらった結果によると、「ぐらぐら台：12票」と「劇：8票」への票が多い結果となった。ぐらぐら台については、「揺れ」がもっとも疑似体験がしにくく、珍しさも手伝ったものと考えられる。劇や歌などは、子どもでも分かりやすいアプローチが防災と結び付くも

のとして、高評価を得たと考えられる。こうしたものを保育者たちが意識して、日常の保育の中で園での防災(安全)教育に活用し、意識を高めることができれば、より効果的な防災保育になるであろう。

5. 各クラスの保育者アンケート結果の比較

乳児クラスと幼児クラスの子どものための防災教室や振りかえりでの姿の違いを明確にするために、保育者アンケートの記述をもとに樋口⁶⁾のKHCorder⁷⁾によるテキストマイニングを行った。ここでは、母数が少ないことから、乳児クラス(0-2才)と幼児クラス(3-5才)の2つの枠組みで、表3中のアンケートの記述式の項目に回答された文言をもとに分析を行った。ここでの分析では、出現回数の多い語句をキーワードとした頻出度を算出し、クロス集計を行った。図5は、抽出語句全数に対する対象語句の割合、ならびに各語句間の関係性(正負の相関で表現)を示す。以下では、その結果について保育者の記述(原文のまま抜粋、一部表4の記載と重複)と合わせて記述する。

両クラスで共通する頻出語は、「体験」の語句で、それが最も多かった。各自由記述内で、いずれのクラスにおいても、課題などマイナスな面は書かれておらず、20名すべての保育者が体験的取り組みであったことを評価する意見が記述されていた。また、「実際に」という語が多く、「体験」という語句と関連性が高くなっていった。

5.1 乳児クラスについて

頻出語の違いは、乳児クラスでは、幼児クラスよりも「話し」が多く記述されていることが図5から分かる。それは文中で「話をするより」という言葉で表現されており、幼児クラスにおける保育の特徴として挙げられる。つまり、(保育者などが)話しをするよりも実際に体験できることで、0-2才の乳児でも分かりやすく、興味を持って防災を学べたことが記述されたと解釈できる。具体的には、「ペープサートや人形劇は、話すだけでなく、より集中して内容が理解でき、印象に残りやすいので良かった。」(保育者歴24年、0才担当)、「実際に体験したことで、話で聞くよりも印象に残ったと思う。」(同歴未記入、1才担当)、「遊びの中で、防災害に対しての経験を体験できて良かった。」(同歴20年、2才担当)と回答されていた。

また、表3のQ6や7の気づきや感想からは、1才担当保育者からは「とても分かりやすかったと思う。特にダンゴ虫のポーズは乳児にも分かりやすく、すぐに覚えたので良かった。」と記述があり、ダンスを踊ってダンゴ虫のポーズをしたことで1歳児クラスの幼児がポーズを覚えたことが記されていた。

さらに、Q8の振り返り後などにおける子どものたちの言動に関する記述によると、「人形劇に興味深くよ

く見ていて、「地震」そのものの捉え方は難しくても、うさぎの怪我を心配したり物が倒れてくることに驚いたりして、話に入り込んでいました。」「避難時のダンゴ虫のポーズをわかりやすく歌やダンスにのせて教えてもらえたことで覚えやすく、やってみようとする姿が見られました。」「各体験コーナーでは、興味を持ってやってみようとする子どもと怖がる子どもがいましたが、今すぐは地震への理解がむずかしくても、いつ起こるかわからないことなので、いざ起きた時に今日の経験を思い出し、咄嗟の行動や身を守る術につながっていくことができれば良いなと思いました。」と記述されていた。こうした記述から、乳児クラスでは地震や防災の意味を言葉では十分に理解をしていなくても、楽しく保育者と一緒に体験し、防災について学べることで真似をしたり、避難をしようとしたりすることそのものが、低年齢からの防災についての学びとして考えられていたようである。

5.2 幼児クラスについて

頻出語の違いは、幼児クラスでは、乳児クラスに比して「体験」という単語のほかに、「防災」や「地震」といった語が多くなっており(図5)、次いで「想定」や「命・安全」といった語も多く記述されていた。これらの語句は、地震が起きた時のことを想定したりイメージしたりしながら、幼児なりに感じ、興味を持って楽しく防災を学ぶことについての記述が多くなっていったといえる。

また、表3のQ6や7の気づきや感想からは、3才担当の保育者(保育者歴29年)は、もくもくトンネルについて、「煙の話はしていても体験していなかったの、煙の中に入ることがとてもいい経験になり、また実際に目にしたことこれから子どもたちへ話しやすくなった。」と記入し、また、別の3才担当保育者(保育者歴5年)は、「子どもたちだけでなく、職員も良い経験になったと思う。実際に地震や火災が起こった際に、私達保育者も今回の体験のおかげで想定して動くことができると思う。また、命の大切さや安全についても学ぶ機会となっていたようである。」とあることから幼児と保育者が災害時のイメージを持てたことを記述する意見があった。

さらに、Q8の事後の振り返りに関する記述では、3才児クラス保育者からは、「ペープサートでの話が視覚的にもすごく理解しやすかったようで、振り返りの際に「うさぎのが楽しかった。」や「ぐらぐら台では「あれが怖かった。楽しかった。」など子どもたちから様々な意見があったとされ、「煙を吸うとどのような危険があるのか、じゃりじゃり道を歩く時の靴の重要性など改めて伝えることで経験したことと結びつき、理解を深めることができたと感じる。」(保育者歴29年、3才担当)とあり、経験をもとに、イメージして言葉で確認



図7 4才児クラスの子どもたちが描いた絵

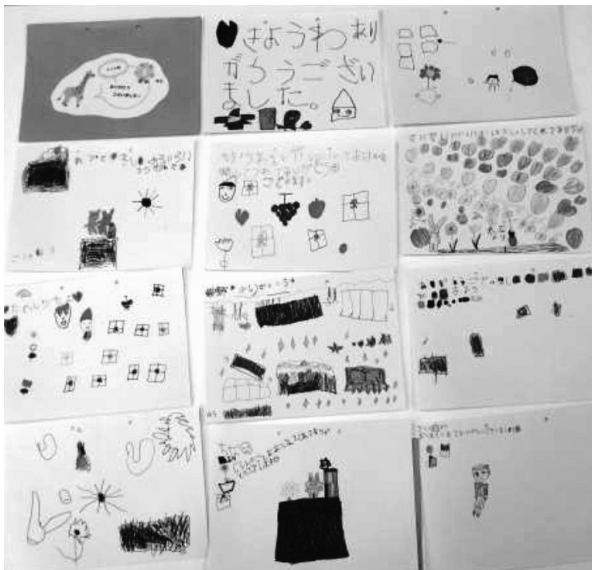


図8 5才児クラスの子どもたちが描いた絵

7. まとめ

これまで実践してきた防災保育・教室について、1-2才児クラス、3-4才児クラスと5才児クラスの発達年齢別の実践実施について記述し、子どもたちの姿の違いの一端を報告した。今回の取り組みでクラスを分けて実施したことで、教室終了後に1才児クラスの子どもが怪我をしたうさぎを心配して保育者に「(うさぎさんが)痛い痛い」と伝えてくるなど、より低年齢でも、イメージを伴うことでより子どもたちなりの理解を持つことができ、保育者が一緒に参加し、「子どものやろうとする姿を認め、援助する」ことで日常の遊びの延長として防災保育に取り組めることが分かった。

こうした違いを抽出し、内容等に反映させることは、今後の質の向上に繋がるものと考えられ、さらにその効果検証についての可能性も模索できるものと考えられる。

なお、本稿の内容は、日本保育学会2024年度大会(山田・丁子⁸⁾)で発表した内容をもとに加筆・取りまとめたものである。また、本研究の遂行および本稿の作成に際し、幼保連携型認定こども園東三国丘保育園への許諾を得るとともに、個人情報保護のために、図表・アンケート等において個人の特定ができないよう処理を施している。

謝辞

本報告で示した実践やアンケート結果は、社会福祉法人堺暁福祉会幼保連携型認定こども園東三国丘保育園の先生方・関係者のみなさまと和歌山大学教育学部の学生たちの協力により実施されたものです。また、本稿の作成に当たり2名の匿名の査読者の方からは有益なコメントを頂いた。なお、この研究の一部は、JSPS科研費(19K02615、23K02232)の補助により実施されました。関係者各位に記して感謝いたします。

引用文献

- 1) 文部科学省「学校防災のための参考資料」『「生きる力」を育む防災教育の展開』、2013、p. 230.
- 2) 文部科学省「文部科学省における防災教育の現状について」、https://www.mext.go.jp/content/20210728-mxt_kyousei02-000017067-03.pdf、最終閲覧日：2024年7月23日.
- 3) 内閣府 防災教育・周知啓発ワーキンググループ防災教育チーム「防災・減災、国土強靱化新時代の実現のための提言」、2021、https://www.bousai.go.jp/kaigirep/teigen/pdf/teigen_06.pdf、最終閲覧日：2024年9月23日.
- 4) 山田伸之・丁子かおる「乳幼児からの体験型地震防災保育プログラムの開発」、日本保育学会第65回大会、2012、B2、090.
- 5) 山田伸之・丁子かおる「和歌山市の小規模校・園での地震防災教室・避難訓練の実践事例」、『和歌山大学教育学部紀要—教育科学—』、第73集、2023、pp. 43-50. (DOI: 10.19002/AN00257966.73.43)
- 6) 樋口耕一「社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して(第2版)」、ナカニシヤ出版、2020年
- 7) 樋口耕一「KH coder」、<https://kncoder.net>、最終閲覧日：2024年7月8日.
- 8) 山田伸之・丁子かおる「発達に応じた教育的理解を促す防災保育の試み」、『日本保育学会第77回大会』日本保育学会、2024、P-A-5-05.